

2020年7月19日 説教「主は監獄でもヨセフと共に」

創世記 39章 11～23節

ポティファルの下で、大きな責任を与えられていたヨセフ。日々、忠実に働いていました。しかし、そんなヨセフに大試練がやってきたのです。

1. 誘惑を退けて (11～15節)

①誰もいない日に (11～12)「ある日のこと、彼が仕事をしようとして家に入ると、家の中には、家の子どもがひとりもそこにいなかった。それで彼女はヨセフの上着をつかんで、『私と寝ておくれ』と言った。しかしヨセフはその上着を彼女の手に残し、逃げて外へ出た」その日、ポティファルの家にはその妻だけしかいませんでした。ヨセフが仕事でそこに入ると、彼女はいつものように早速ヨセフを誘惑したのです。上着をつかんで逃げられないようにして、言い寄ったのです。しかし、ヨセフの清い決心は変わっていませんでした。財をあずけるほどに信頼してくれている主人を裏切るわけにはいきません。また神に対して罪を犯すことはできないという思いから、彼は逃げ出したのです。しかし、悪いことに上着を彼女にとられてしまったのです。

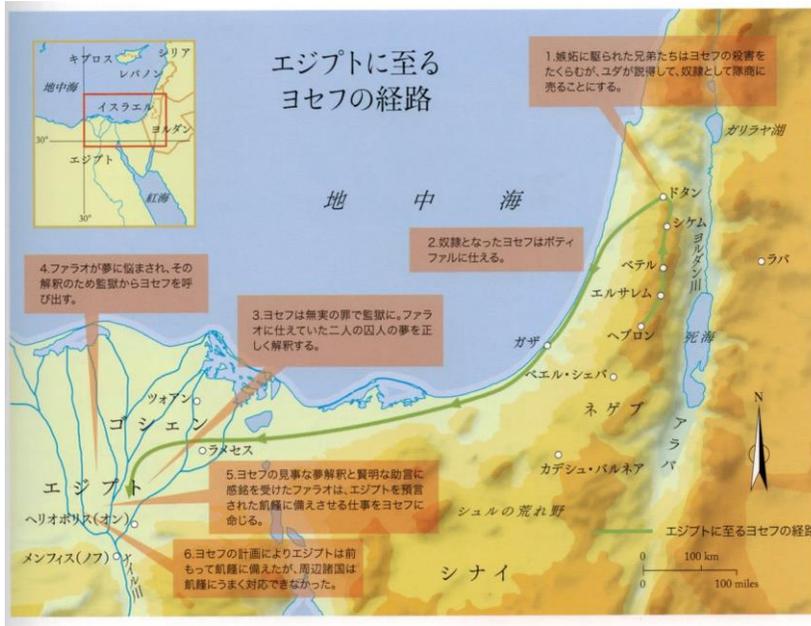
②妻の悪知恵 (13～14)「彼が上着を彼女の手に残して外へ逃げたのを見ると、彼女は、その家の子どもを呼び寄せ、彼らにこう言った。『ご覧。主人は私をもてあそぶためにヘブル人を私たちのところへ連れこんだのです。あの男が私と寝ようとして入って来たので、私は大声をあげたのです。』」ポティファルの妻は悪知恵を働かせました。逃げたヨセフをこらしめるべく、家人を呼んだのです。そして、ヨセフは主人が連れ込んだとんでもない男と吹聴したうえで、家人の心を誘導したのです。つまり、ヨセフは自分(妻)の所に来て襲いかかり悪さをしようとしたので、大声を上げたという嘘をついたのです。

③上着という証拠 (15)「私が声をあげて叫んだのを聞いて、あの男は私のそばに自分の上着を残し、逃げて外に出て行きました。」大声を上げたので、ヨセフは慌てて逃げ、上着を残して出ていったという作り話でした。思いつきとはいえ、巧みに作られた偽り物語でした。しかし、彼女には、ヨセフの上着という動かない証拠であったのです。

2. 夫ポティファルに訴える妻 (16～18節)

①主人が帰るまで(16)「彼女は、主人が家に帰って来るまで、その上着を自分のそばに置いていた。」その上着は彼女にとっては、伝家の宝刀のようなもので、ヨセフを貶める重要な証拠であったのです。そこで、主人がもどるまでは手元に後生大事にとっておいたのです。

②夫への告げ口(17)「こうして彼女は主人に、このように告げて言った。『あなたが私たちのところに連れて来られたヘブル人の奴隷は、私にいたずらをしようとして私のところに入ってきました。』」妻は夫



に言ったのです。あのヘブル人の奴隷が、私にいたずらをしようとしたのですと、真逆の事実を伝えました。ヘブル人の奴隷にも拘わらずと強調もしました。プライドを傷つけられた女性の復讐でした。

- ③上着を差し出して (18) **「私が声をあげて叫んだので、私のそばに上着を残して外に逃げていきました。」** 逃げだした経過説明は家人に伝えたものと同じでした。証拠であるヨセフの上着を差し出しながら、説明したことはいうまでもないことだったでしょう。

3. 監獄での主の恵み (19~23 節)

- ①怒りに燃えて (19~20) **「主人は妻が、『あなたの奴隷は私にこのようなことをしたのです。』と言って、告げたことばを聞いて、怒りに燃えた。ヨセフの主人は彼を捕らえ、王の囚人が監禁されている監獄へ彼を入れた。こうして彼は監獄にいた。」** さて、一方の夫ポティファルは、妻の訴えを聞いて、怒りに燃えました。あれだけ大切にしてい取り立て、財産まであずけるほどにしていたのです。なのに、そのヨセフが裏切って、妻にいたずらを働こうとしたというのです。ヨセフから説明を聞くということもなかったようで、早速ヨセフを捕らえたのです。ポティファルハ侍従長でしたが、40 章 3 節によると、どうも彼の敷地内に王の牢獄があったようです。ヨセフをその管理者に、引き渡したのです。こうして、ヨセフは監獄に閉じ込められることになりました。売られて奴隷としてエジプトに来た時に続いて、ヨセフは再びどん底に引き落とされてしまったのです。
- ②主はヨセフと共に (21~22) **「しかし、主はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。それで監獄の長は、その監獄にいるすべての囚人をヨセフの手にゆだねた。ヨセフはそこでなされるすべてのことを管理するようになった。」** そんななかでも、ヨセフには主がともにいてくださいました。主の恵みにあずかることができたのです。なんと、監獄長の心を主は動かしてくださったのです。ヨセフは監獄の中であって、囚人たちのまとめ役のような立場へとさせてもらったのです。囚人たちの状況をまとめたりするに際しては、そのなかにおいての自由を与えられていたということでもあったのでしょう。
- ③ヨセフは成功し (23) **「監獄の長は、ヨセフの手に任せたことについては何も干渉しなかった。それは主が彼とともにおられ、彼が何をしても、主がそれを成功させてくださったからである。」** 監獄長がヨセフに任せたことについて、口出しをしないほどに、信頼されるようになったのです。監獄の中にあっても取り立てられるという、驚くべきことがおきました。ヨセフのなすことは、こんな状況のなかにあっても、うまくいったのです。何をしても成功するということは、あの祖父イサクの収穫を祝し、ゲラルの谷での井戸掘りでも、豊富水が与えられた (26 章) ということを思い出します。

《結論》

ヨセフはただでさえ、難しい立場でした。なにしろ、遠くカナン之地において、兄弟達に売られて奴隷としてエジプトにやってきたのです。彼を買ってくれたのは、王の侍従長であるポティファルで、ヨセフはそこでもかく一生懸命に働いたのです。余計なことは考えずに、与えられた仕事を忠実にこなしたのです。だからこそ、主人も彼の働く姿勢や能力をみて、要職を与えたのです。家の財産を任されるほどに、ヨセフは信頼を得ていたのです。彼は主人のポティファルに喜ばれるよう、万事に気を引き締めていたと思われま。ところがです。こともあろうに、その主人の妻が誘惑をしかけてきたのです。家のことは、主人の許可がいらないほどになっていましたが、主人の奥様と相通ずるようなことは、彼にとって決してあってはならないことでした。ですから、主人の妻の言い寄りに対して、頑としてこれを受け入れずに退けてきたのです。しかし、その誘惑は執拗でありました。そしてついにその妻のわなにはまってしまう。

ヨセフは誘惑を受けて逃げましたが、上着をとられてしまったのです。それを証拠とされてしまうのです。家人から始まり、ついに主人にまで嘘を言われて、罪を課せられてしまうのです。完全な濡れ衣でありました。ここで注目したいことは、ポティファルはヨセフに尋問していないことです。それは、もしかすると、どこかに妻に原因があるのかもしれないと思ったからかもしれません。もう一つは、ヨセフが主人に弁明していないことです。ヨセフは死刑になってもしかたがないと考えるほどに、腹がすわっていたのでしょう。ポティファルは怒りの頂点にあるこの時にも、まだヨセフを死刑へと追い込む気にはなれなかったようです。兄弟達の殺意から免れたヨセフは、今ここでもポティファルの心のぎりぎりのところで、殺すところまでは進ませなかったのです。

そして、監獄においても、新たなる恵みがヨセフに注がれようとしていました。今度は監獄の長の心のうちに、ヨセフを用いようとする心が授けられたのです。二番底の淵で、温かい手が伸べられたのです。ヨセフは獄中の管理の仕事任せられたのです。「ショーシャンクの空に」という映画の中で、元銀行員のアンディーは刑務所長の経理の仕事任せられて、準備を整えて、やがて脱走します。しかし、ヨセフには脱走する気は全くありません。そこでも一生懸命に働きました。主がともにいてくださったので、彼がすることは祝福されました。ここに、彼の主への奉仕の姿勢の模範を見るのです。コロサイ人への手紙 3 章 23 節にこうあります。「何をすることも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい」。ヨセフは人以上に、神を恐れる信仰が与えられていたようです。人生には何が起きるかはわかりませんが、主がともに歩んでくださるなら、ヨセフのように、きっと主は備えてくださり、守ってくださいます。何をなすにも、主に向かってなす心をもって歩みたいので

す。主がきっとよくしてくださると信じ、今週も主を見上げていきましょう。